第4章　占いの意志決定のプロセス

1. はじめに

バリでは世界各地の多くの民俗事例と同様に、占いは意志決定の過程において重要な役割を持つ。もちろんこれからの行動における指針や決定の全てを占いに頼るわけではないが、問題の背後に祖霊や憑依霊、妖術の介入が疑われる場合、占いはオーソライズされた情報源となりうるものである。すなわち、災いの原因となる実際上の出来事の裏側に潜む不可視の世界での危機や問題を開陳し、それをの打開する策を啓示する。その情報は目に見える災難についての説明を補完するが、断片的で不確かで解釈の余地を大きく許すものである。そして、バリの人々は、占いがはずれる場合があることも知っている。しかし、彼らは良い占い師を探す場合であれ、複数の占い師に同一の問題について尋ねる場合であれ、基本的に占い師の言葉を信頼し、それにそって行動を修正していく。ということは、占いは彼らが信じ得るだけの信憑性を獲得していることになる。

学史上では、占いは何らかの問題状況で求められる「知見」を得る技術として捉えられ、その分析枠組みは機能主義的視点にはじまり、これまで認知様式としての占い研究がなされてきた。近年の研究の流れでは、占いの「判じ」と、それを提示するセアンスという場に注目し、その個々の事例を分析することに重点を置くようになった。さらに現在では、占いは「解釈行為」であるという視点から分析されるようになっている。浜本は占いの手続きと判じに着目し、「解釈のプロセス自体の特徴」をみるためにその関係を問題化して考察した[浜本 1983：43]。また浜本は、ケニアのドゥルマの占いの語りのテキストを分析し、出来事の真実を知っているはずの占い師がもう一度クライアントに不幸の経験を語らせるという「再記述」の構造から、「占い師は相談者の抱えている『問題』が何であるかを、そこに含まれる諸問題を『道』にそって示し、妖術やら憑依霊やらの観念によって組織された物語として提出」し、「それは相談者の苦難の経験を、それらを語り直すことを通じて変質させ」ていることを明らかにした[浜本 1993：18]。この論考の主題は、本論と問題意識を共有するものであり、一つの指針となるものである。

本稿の分析に際して中心となるのは、占いの場における語りのテキストである。会話の中には、多層的な複雑さが含まれている。会話はその参与者たちが生きている世界全体につながり、その世界の様々な表情を刻印する。それを分析することは、彼らの経験や知識をつかみ取るということであり、会話が社会的に組織されているということの決定的な重要性が明らかになると考えている。くわえて、現在までの研究で

はあまり目を向けられなかった、占いにおもむく以前の状況と占い以後の行動についても詳細に検討する。本論は、時系列的な視点を加味することで、バリの人々がどのように災厄を解釈し、何が災厄時における人々の行動基準となるのかを明らかにするとともに、行為の発動の場である占いの現場の文化的位置を確認することを目的としたい。

2. 占いの現場と人々の行動

2-1. 出来事の背景

事件は、2002 年2月初旬に第7夫人ルミの次女ワティが黒呪術によって悪霊に取り憑かれ錯乱したことに端を発する。これ以前にも、ワティは慢性の頭痛と腹痛を訴えていたが、この時から悪霊や祖霊が憑依するようになる。彼女に霊が憑依した時の発言から、彼女の病の原因が第8夫人ニラの黒呪術とみなされた。さらにこの時期におこった数々の家族の病や事故などの災厄もまた、ニラの黒呪術によるものであることが判明する。そこで、ルミは娘の病や家族におこった災厄の原因とその対処法を知るために、隣村に住むトゥヌンと呼称される女性占い師のもとにおもむく。

占いの行われる場所は、占い師の家の北東に位置する屋敷寺の中である。そこは相談者たちの待合い場所からさほど離れておらず、占いはほとんど衆人環視に近い状態で占いは行われる。ルミは、本稿が対象とする占い以前に2度この占い師のところを訪れている。1度目はワティが病におちいった直後の2月初旬、2度目はワティの症状が回復したとみられた頃の4月 15 日である。

1度目の訪問では、ワティの病の原因について尋ね、病の背後にある黒呪術の存在と神上がり儀礼の未遂行という要件を言い渡される。2度目の訪問では、ワティの快復具合を聞き、完治したとの答えをもらうが、同時に神上がり儀礼を速やかにおこなうように勧告される。

ここで、もう一度事件を占い師の発言と家族の行動を中心に振り返ってみよう。

この家族は神上がり儀礼に向けて家系図の奉納儀礼をおこなうなど準備に怠りなかったが、神上がり儀礼をおこなう上で、ある問題に直面することとなる。家族分裂の危機である。家族儀礼の際に使用する一族寺は、もう一つの家族（長老クチョスの兄弟の子孫）と共有している。彼らはクチョスの家族が出自と考える起源集団パセック・ゲルゲルに対する帰依を拒んだのである。もともとはこれらの両家族を含めた一族は、自らの起源集団を明確には知らず、2つの起源集団の候補をもっていた。それがパ

セック・ゲルゲルであり、プラ・サリであった。クチョスの家族はすでにトゥヌンから、自分たちの起源集団がパセック・ゲルゲルであることを聞いていたが、もう一つの家族はプラ・サリが自分たちの起源集団であることを信じ、クチョスの家族の意見に従わなかった。この家族は一族寺で行われた2度の儀礼をボイコットしたのである。こうした一族の分裂の危機に際して、ルミはあらためてトゥヌンに相談をすることになる。以下はそのやりとりである。

2-2. 占いの現場

以下のテキストは、2002 年 5 月 29 日に相談者の住む村の隣村であるQ村（カランガスム県内）で採取されたものである。採取方法はビデオカメラとテープレコーダーを使用した。採取されたテキストは、まず現地の人間にバリ語からインドネシア語に訳してもらい、インドネシア語を筆者が日本語に翻訳すると作業を経ている。その際には、バリ語に存在する敬語や普通語などがどの部分なのか、どのようなニュアンスなのかという点は、バリの人に指導を受けているものの、十全に捉えきれたとはいえない。本論のテキストはインドネシア語と日本語という二重のフィルターがかかっているため、問題設定の主眼を会話の内容と構成（会話の流れ）としていることをお断りしておく。また、本テキストは、導入部を省略していること、原語の併記はおこなわないこともあわせて了解されたい。斜体になっている箇所は、祖霊が話したと考えられている部分である。（括弧内は筆者の補足）である。

この現場には I7（第7夫人ルミ）とその付き添いの IN（第1夫人長男の妻）、IN の長男レイモンド、そして筆者がいた。主にトゥヌン（TT）と話していたのはルミであり、レイモンドは一言も発さないままであった。

1-I7：私はご先祖様にお尋ねします。今、誰が賛成していないのかを。それが（その家族の）賛成を得るために教えていただきたいことなのです。

2-TT：もうそのことは言ったはずです、奥さん。3度も4度もご先祖様にそのことを聞いてはなりません。あなたは（あなた方が）すでに困難を経験することで、その証拠を見たのではなかったのですか？一族寺についていくのはかまいません。しかし、お祈りだけです。なぜならプラ・サリは女性側の先祖だからです。南側に住む家族だけはプラ・サリにいってもかまいません。この家族は起源が異なります。これについてはすでにご先祖様が3、4回おっしゃいました。男性側の先祖からの子孫は、そしてあなたもパセック・ゲルゲルについていくと約束した

はずです。なぜなら、あなたはプラ・サリの子孫ではないし、そのことはすでにご先祖様が知らせたことです。

全ての家族が一つになったなら、その時初めて祖霊神は一族寺に定住したいと考えている。つまりは、一つの一族寺に一つの起源集団ということだ。そうだろう？それがまさに一族というものであり、もし我々が間違った一族につけば、困難が 生じるだろう。他人の家族の中に入って生活するようなものだ。我々が正しく入るべき起源集団、これを捨てて、違った起源集団に加入する。何が起こると思う、奥さん？すでに何度もご先祖様はあなたに教えた。あなたはどこへ行っても、先祖が与える決まった説明を求めているのだ。同じ事を問うている。(そして答えは) おまえはパセック・ゲルゲルの子孫だと (いうことだ)。

3-I7：はい、私はクチョスの一族の人間ですし、すでに (先祖がパセック・ゲルゲルであることを) 信じていますし、他の家族もパセック・ゲルゲルに加わろうとしています。

4-TT：*正しくは一つのダディアには一人の先祖、いま (の状況) はどうなのだ？プラ・サリの人間がいたり、ゲルゲルの人間がいたり、いったいどっちになるか？*

5-I7：いま私は家族が全てが等しく従うようにするため、どうすればよいのかご先祖様にお教えを乞いたいのです。

6-TT：*その質問はもうすんだはずだ。(家族が) 一つになりたくない、これはご先祖さまが新たに荼毘に付されることができるのか、奥さん？それから、おまえのすべての先祖と祖霊神に一族寺に住んでもらい、供養をしなければならない。全員が祖霊神に従いたがっている、そうだろう、奥さん？つまり、子孫達がそのように取り扱わなかったため、今になって問題が起こってしまった。*

7-I7：いまでは一族のものは皆約束をしようとしていますし、それを証明しようとしていますし、仰せに従おうとしています。

8-TT：*もしングロラスをすると誓うなら、(家族が) 一つになることが先である。もし浄化儀礼を行うなら、先祖や祖霊神を呼ぶことになる、そうだろう？今もしも先祖が屋敷寺に招かれて降りてきても、どこに行けばいいのだ。どの起源集団におまえは追従するのか。*

もし家族が一つになったとして、そしてプラ・サリに加わるなら、おまえは必ず再び困難な事態に直面するだろう。

9-I7：私の家族はすでにパセック・ゲルゲルについて行くつもりです。

10-TT：*南に住んでいる者はついていかないのではないか？*

11-I7：（そのような者も）います。なぜなら（パセック・ゲルゲルにはいるのを）賛同せず、拒んでいるからです。

12-TT：*先祖達もングロラス儀礼を求めているが、半分のングロラス儀礼なんて許されない。もし中途半端なングロラス儀礼なら、ある霊はより高い位置に、ある霊はより低い位置にといった事態を引き起こしてしまうだろう。もしおまえが南に住む家族を含む全員を呼び込むことができると約束するなら問題はないが、お前の家族だけならば許されない。なぜなら、全ての子孫はいずれングロラス儀礼をするからだ。そうだろう？*

13-I7：いま、私はどうすればいいのでしょうか？

14-TT：*もし本当におまえがパセック・ゲルゲルの起源神に組みするならば、神は必ず一族寺に定住するだろう。そして清い心で起源神を敬うなら、必ず神は祖霊を一族寺にすむように命じるだろう。神は一族寺に住むのをまだ迷っている。なぜなら、いまだに家族達は争い、また混乱しているからだ。*

15-I7：祖霊神様に教えを乞います。皆の行いをよくするために、賛成しないダディアの人々をどうすればよいのでしょうか？

16-TT：*どうすればいいか。皆は頑固に対立している。*

17-I7：はい、まさにその通りです。

18-TT：*どちらの先祖集団と対立したいのだ？プラ・サリにつくのか？皆で決めた決定が、もしパセック・ゲルゲルに加入するということなら、ご先祖達も従うだろう。もしプラ・サリならば、いったいどうなるだろうね？*

19-IN：では、私がどちらかに従うのが正しいのでしょう？

20-TT：おお、もしあなたが一族寺でングロラス儀礼をするなら、もし半分の人間だけで行うならば、半分の祖霊達はどうなるでしょう？ご先祖様達もングロラス儀礼が行われることは喜ばしいのです。もしあなたがングロラス儀礼に家族全員を集めることができればですが。

21-I7：それなら、後ほど、もう1度家族会議をしてみます。

22-TT：*決定があちらこちらに行くので、私は考え続けているのだ。私が家族を求めるのは、当たり前のことだろう？正しいものを求めて家についたら、（祖先をパセック・ゲルゲルと）信じる者がいないならどうだろう。もちろんプラ・サリの出身者もいるが、それは女性側の家系のことなのだ。それはもう何度もいったはずだ。*

23-I7：私の心はもう決まっております。パセック・ゲルゲルに従います。

24-TT：すべては出そろいました。もし以前のようにあなたの家族を説得できなければ、一族は倒壊するでしょう。あなたの家族がすでに多くの病気を経験しているからです。

25-I7：まさにその通りです。

26-TT：あなたの夫（クチョス）は相当な知恵の持ち主ですね？いろんなところで知恵をふるったが、ダディアの人々までは説得できなかったのですね。

27-I7：以前の一族会議の時にそうしましたが、賛成しない者がおりました。どうすればいいのでしょうか？

28-TT：*もしその者がずっと賛成しないならば、ご先祖様達はダディアにいるお前達が2つになることを望まない。お前は必ず祖霊神、起源神に従い、ひとつにしなければならない。しかし、ングロラス儀礼の時は、すべての子孫達がングロラス儀礼をしなければならない。賛成の者も反対の者も必ず供物を捧げ、望むと望まないにかかわらず、だれもが必ず葬送儀礼に参加しなければならない。*

そこで祖霊は教えよう。全ての者が従うために、すべての子孫達が葉にあがるために[1]、ングロラス儀礼からまた海に行くのが正しいというのか[2]？（先祖は）子孫を見守るための場所を求め、起源神とともにいることを求め、家族皆がひとつになることを求める。そうだね？なぜなら多くの子孫達もまた子供・孫を抱えている。しかし、その知恵を信じ、また使われないままの知恵を信じるとするなら、一族寺はそのまま放置されたままであろう。

29-I7：今、ご先祖様は、誰が一族寺を大事にしているように見えますか？私の夫の家族で一族寺の手入れをしている者の中で。

30-TT：*皆、大事にしている。しかし、もし南に住む者が家族を別れさせたいとするならば、いつひとつになるのだ？*

そう、今賛成している者もしていない者もお祈りをするために一族寺に来ている。妨げてはならない！お前が祈りをする者を妨げ、もしその者が来ないようになれば、それはいけないことなのだ。お前は問題を複雑にしてはならない。その者は、今、家族をひとつにしたいと思っている。お前にとって喜ばしいことだ。だが喝采してはならない。もしお前が不安になりたくないなら、そのままにしておき、お前の心をひとつにして置きなさい。これは実は難しいことなのだ。もしングロラス儀礼を行いたいならば、半分の人間ではいけない。もし単なる葬送儀礼（ngaben）ならば、参加する者・しない者があるだろう。それはどちらでもかまわない。しかし、ングロラス儀礼は必ずすべての人間、幼い者も年寄

りも若者も、全員参加しなければならないのだ。

今は再び話し合うことが先決だ。たとえ彼がまた同意しなくとも、説得を続けなさい。わかったか？もしお前が家族に対して誠実ならば、葉に上がることができるだろう。

31-IN：はい、本当にそう望みます。すべての子孫を呼び集めて相談します。

32-TT：北にいるダディアの人々はパセック・ゲルゲルである意志を強め、南にいる者はプラ・サリである意志を固めている。しかし再び決意を翻すことはできる。

33-IN：なぜなら、すでにそのような者もいます。私の家族はすでにパセック・ゲルゲルの寺院で尋ねております。今、私は、私たちの祖霊神がパセック・ゲルゲルに属することを確信したのです。

34-TT：もうすでにクルンクンの寺院で見たのですか。ロンタール文書（後述）の中に子孫のすべてがそこに書かれていたことをみたのですね。プラ・サリでは、ありませんでしたね、奥さん？

35-I7：そのとおりです。

36-TT：もちろんあるわけがありません。子孫たちはプラ・サリではない。それはすでに3、4回いいました。

37-I7：まさにおっしゃるとおりです。祖霊神様は賛成している者やしていない者を知っておられますね。祖霊神様の教えのために、反対者に対して今祖霊神様はどうすればよいとお考えですか？

38-TT：*その者は沢山の病気をし、困難があったね。しかし私は話（つぶやき）をその者に与えた。それからどうしたいのだ？*

39-I7：その賛成しない者は、どうされたいのでしょうか？パセック・ゲルゲルにつき従いたいのでしょうか？

40-TT：そうならば、最後まで先祖が見ているところ（一族寺）で会合しなさい。それでも、その者はプラ・サリに参加しようとするかもしれません。それから、どうしたいのだ？

41-I7：もうすでにそうであるなら、何をすべきなのでしょうか？

42-TT：はい、今、先祖はどうすべきか。まだ生きている者で話のうまい人間に、パセック・ゲルゲルに従うのが誰かを会合の際に話してもらえば、一族は一つになれるのではないでしょうか？

43-I7：はい、そのとおりです。今度の満月の日にパセック・ゲルゲルを信じる人を集めます。

44-TT：*その人々が来て、パセック・ゲルゲルを信じない人は鼻の真ん中を見るまで来ない（絶対に来ないという意味の慣用句）。*

45-I7：はい、その通りです。聞かれるにはよくない会議ですので。

46-TT：話に混乱はないでしょう。

47-IN：いま、祖霊神様はおっしゃいました。彼らがパセック・ゲルゲルに従うためだと。

48-TT：*なぜなら、祖霊がいうには、もし彼らがパセック・ゲルゲルに従いたいなら、お前は大喜びをしてはいけないし、喝采してもいけない。そう、もし彼らが自分の心通り自分たちの言葉に従うなら、プラ・サリにいってしまうだろう。決してお前は混乱しながら計画を遂行してはならないし、続けてはならない。もしよい心で行動するなら、力を得ることができる。どちらかを判断しなければならないときは、正しく判断しなさい、よい方に判断しなさい。今、そこではあなたは一人に見えます。*

49-I7：はい。祖霊神様の平安、安寧、幸福のために。

50-TT：困難を経て、病を経て、子孫達は重い病を患ったように、沢山の困難にあったように感じている。

51-I7：今ご先祖様は全ての子孫を求めていらっしゃる。

52-TT：そう、いまは家族を集め、もう一度会合を持つことです。いいですね？もしはっきりとプラ・サリに行くと決めてしまったなら、早く尋ねることです。いまあなたはパセック・ゲルゲルに従うことを決めた。もし彼らがプラ・サリに入るなら、あなたはパセック・ゲルゲルの子孫をさがしなさい。行動をおこしなさい。

　そう、もし葬儀（ngaben）のようなものを正しいとするなら、全ての家族が従う必要があるのか？そう、あなたはパセック・ゲルゲルのひとつの聖水を使う家族を探し、家族をひとつにしなければならない。そして今お前は考えをよきものにし、覚悟をする。そうすれば先祖はお前を助けるだろう。

53-I7：はい、いま、祖霊神様は正しく行動する方法を教えて下さいました。なぜなら、馬鹿な子孫をお持ちになったからです。けれども、外にあろうとどこにあろうと、平安のためにご先祖様は私たちを見守って下さっておられます。

54-TT：*その通りです。もしお前が家族をひとつにしたいなら、それは祖霊に対しての証明になるでしょう。*それがすめば、祖霊神はプラ・イブに住みたくなることでしょう。しかし、あなたはングロラスをする約束をしなければなりません。もし子孫を取るならば、子孫は皆がガジュマロの木の葉に上がることができる

でしょう。あなたはどれだけのことができるのか？半分の力しか無ければ、半分の力しか使えない。ゆえに、自分で全てのことを為そうとしてはいけません（自分の力量のこと以上のことはするな）。もし半分の力で全てを行おうとするなら、なにも得るものはないでしょう。

55-I7：ングロラス儀礼をする最低限の準備はできています。

56-TT：それは余りいいことではありません、奥さん。ングロラス儀礼の半分の段階をまずやる姿勢でいなさい。家族をひとつにするのが先決です。そのために人間関係の回復をすることが先です。相互に助け合うために。しかし、まだ考えが定まらず迷っているならば、行動するのは難しいでしょう。できるか、できないか。子孫達は〈だらない考えを捨てなさい。

57-I7：はい、いまなお、〈だらない考えを持つものがいれば、その考えを捨てさせます。ご先祖様が家族をひとつにするために教えて下さったのだから。

58-TT：わかりましたね。お供えのことはもういいましたね。忠告しましたね。従いなさい。あなたは祖霊神に約束しなさい。そして証明しなさい。従いなさい。あなたが判断することは、起源神に従うことです。そして家族を一つにしてご先祖様にお供えをしなさい。ご先祖様は行ってしまわれた。

3．考察

3-1．会話の流れと特徴

トゥヌンと相談者の会話の流れを大雑把に説明すると、①相談者の抱えている問題の所在を明らかにし、②問題の対処法とそれに関する条件を教え、③具体的・抽象的な忠告を与える、という三段階になる。トゥヌンの語りの主題は、「起源集団を明確にし、家族の意見をひとつにまとめ、浄化儀礼を行えば、家族に安寧が訪れる」という単純なものである。トゥヌンの長い語りはこの論調から大きく外れることはなかった。しかし、その流れの中で、われわれにとってきわめて奇妙に見える論理的矛盾、不意の省略、冗長な同語反復などが含まれていることに気づく。では、場面場面において、それらはなにを意味しているのだろうか。

まず、やりとりの流れの中で、質疑応答がしばしばかみ合っていないことに気づく。たとえば、上述の 5 と 6 の会話では、「家族をひとつにするためにどうすればいいか」という質問に対して、トゥヌンはすでに答えていると返答し、対処方法は述べないまま、相談者の不明や不誠実を責めるのである。次に 13〜25 のやりとりをみると、13 で再

び相談者は具体的な方法を問うが、トゥヌンは相談者の信仰に対する意志の重要性を説き、論点がずれていく。そして 15〜18 では、質問者の質問に対して質問で答えるというかたちをとり、相談者への脅迫とも取れる発言をする。18 で起源集団の選択を迫られた相談者は、19 においてその正解を尋ねるが、20 での答えは祖霊が安寧を得る条件について話すのである。そして、21 で相談者はこれからの行動の具体的指針を表明するのだが、それについては何も意見を述べず、具体的方策を示さないまま祖霊の不満を表明するのである。相談者はそれに応じて、すでに繰り返し述べているはずの起源集団への参加表明をする。さらに 24 において、トゥヌンはあたかも話はついたかのように語り、もし一族をひとつにできなかったら再び災厄の再発があるということを匂わせる発言をする。それを受けて相談者は、祖霊の意見に同意するのである。全体を通して看取できるのは、トゥヌンは具体的対処法を教えないままに話を進める傾向にあり、いわばロジックではなくレトリックで相談者を説得しようとしているということである。

ただ、たしかにやりとりの後半部では、具体的意見の提示をしている部分もみられる。29・30、40〜48 などが、それである。29・30 では、相談者が「誰」という質問をしているのに対し、トゥヌンは「一族全員」という差し障りのない答えを返す。40〜48 においては具体的に、会議を開くこと、その際には話の上手な人間に説得に当たらせること、儀礼を速やかに行うためにまず賛成者だけで会議を開くことの容認、そして反対者が再び決意を翻すようなことがあれば慎重に扱うことなどの方策が述べられている。ただし、これらの意見はわざわざ祖霊に指示をもらうほどのものではなく、いわば当たり前の一般論にすぎない。しかし、相談者はありがたく祖霊の意見を傾聴し、その指示を行動に移そうとするのである。これについては後述する。

では、次に矛盾をみていこう。この会話の中での最大の矛盾は、一族統合の最大の焦点になっている「南に住む家族」に関わる部分である。前述した 2 の段階では、「南の家族は起源が異な」るのでプラ・サリに追従してもかまわないといってるにもかかわらず、12 においては、「南の家族」のパセック・ゲルゲル参入は不可欠であると前言を翻している。22 では、プラ・サリは女性側、つまり結婚をして嫁いできた女性の起源がプラ・サリであるといっている。もちろん、父系出自集団を形成するバリにおいてこの論理はおかしなものではないのだが、2 の発言からすると明らかに矛盾する。そして、32 において、「南の家族」の決意を変えることができるという可能性を述べながら、44 と 46 では「南の家族」抜きで家族会議をすることを容認する。論理展開は支離滅裂であり、すでに最初の段階でこの件に関するロジックは破綻している。破綻という

いい方が厳しければ、相談者の応答や雰囲気に応じて論理展開を柔軟に変化させたといいかえてもよい。しかしながら、相談者（占い師も？）はその論理的矛盾を気にせず（あるいは気づかず）、質問・傾聴を続けるのである。さらにいえば、相談者は実際には自宅から西に住む家族を、トゥヌンの言うところの「南の家族」とみなしている。筆者がそのことを相談者に指摘すると、西の家族の子供がルミの自宅より南に住んでいるからだと答えた。これもまた明確な拡大解釈である。しかも人々はとくに検証をするでもなく、現実的対処を実行に移していくのである。では、なぜこのようなことがおこるのだろうか。

浜本満は占いの基本的特徴を、「ト占に先立って人々がもっている状況理解や、人々がト占に向かって発する質問と、ト占の結果に、論理的つながりが欠けていること」にあるとし、それを「恣意性の現象」と呼んでいる[浜本 1983]。ここで見られた矛盾を恣意性として考えるならば、トゥヌンは相談者との会話において論理性よりも会話の流れを重視し、いわば即興的なパフォーマンスとして会話を組み立てていると考えられる。従来、人類学では、占いとは占い師が相談者との会話から社会分析を行い、その答えを解釈し見つけていく機能を帯びているとしてきた。また、占い師が主導的に対処法を探知するともみなしてきた。占いにおそらくそのような部分があるのは否めない。しかし、ここで重要なのは、「ト占の結果が示す矛盾は、その回答の不備をではなく、かえって人々の理解の不完全さを示すものとして受け取られ、人々はト占の答えが意味をなすように、理解そのものを作りかえようとする」[浜本 1983：38]点にある。つまり、占いには社会分析などを経なくとも答えがあり、その答えの正当さはア・プリオリに確信されている[3]。すなわち、人々は、恣意的な答えでも有意味であるはずだという前提で解釈し、意志決定をし、行動しているのだ。その矛盾を含む占いのメカニズムから創出された占いの答えを、社会の中の行為のレベルに変換する際、有意で正当なものと意味づけるのである。そうすることで、矛盾は実際上の行為のレベルにおいての障壁ならず、解消するのである。

さらにポイントとなるのは、同語反復である。トゥヌンは相談者がどのような質問をしても、「家族を一つにまとめて儀礼をしなければ、祖霊は浄化されない」という主題を繰り返す。また、相談者もそれを得心のいく答えとして認める。他の具体的な答えを欲する場合にも、それで納得する（あるいはせざるを得ない）のである。ここでは、「家族が一つになり、儀礼を行う」という条件が達成されてはじめて、「祖霊が浄化される」という結果が導き出されるという図式が成立している。つまり、可視的世界の秩序が修復されることが、とりもなおさず不可視の霊的世界の秩序の回復になるのだ。

とするならば、「家族がひとつにならず、儀礼をしない」という命題は、「祖霊が浄化されない」ことに対する帰属原因ということになる。すなわち、二つの世界は相互補完的、または理屈上では不可視的世界が可視的日常世界を先行しているようにみえるが、実のところ、日常的実践では可視的な日常世界が不可視的世界を先行しているのだといえよう。あるいは、やや視点を変えれば、この語りを、可視的日常世界においてバリの常識的慣習を遵守することが、不可視的世界の秩序を護ることになるという「比喩的理解」を行うための語りといえるかもしれない[4]。

では、占いが具体的な答えもなく指針も示さないとするならば、相談者はそこに何を求めているのだろうか。

トゥヌンと相談者のやりとりの前半部は、先にもみたとおり具体的な質問や対処法を尋ねる流れであった。では、やりとりの後半部分はどうか。43~46 の流れでは、相談者のこれから起こす行動について容認しているのである。つまり、「南の家族」を呼ばないままに一族会議を開くということは、一種の抜け駆けであり、裏切り行為なのだが 45 にあるように、それを容認するという。そして相談者は、47 のタームで「いま、祖霊神様はおっしゃいました。彼らがパセック・ゲルゲルに従うためだと」という言質を取り、「南の家族」抜きで家族会議を開くことの正当性を得る。相談者はこの行動を、家族がひとつになるため、ひいては儀礼を行うため、正しく必要なことと認識する。さらに 52 で、トゥヌンは祖霊の教えを守れば加護を与えるといい、53 において、相談者はこれからの行動に確信を持ち、祖霊を称揚する。54～58 では、トゥヌンは慎重に行動することと祖霊の言葉に従うことを勧め、相談者は 57 の発言にあるように祖霊との約束をし、言葉をもらった自分の行動こそ正しいと考えるようになる。ここであらためてやりとりの流れを俯瞰すると、最初は相談者は問題の対処方法を求めていたのが、後半部ではこれから起こす行動への承認をもとめるようになる。こうした、占いの場における祖霊の承認こそが、相談者が未来への行動の意志決定をするにあたって、最も希求されるものといえるだろう。

災厄を日常的な方法では説明のつかない事態とするなら、占いの中において災厄は可視的日常世界に立ち現れ、同時にリアリティをもつのである。つまり、占い師は、相談者の経験の中に含まれてはいなかったある要素をそこに持ち込むことによって、災因を特定し、その対処法を提示するのである。相談者は、自らが認知できる構成要素に占いから得た不可視の超自然的要素を付け加えることによって、自らに起こった災厄の説明を安定させることができるのである。「黒呪術」や「祖霊の零落状態」が単なる仮説的な知識から経験的にリアルな存在に変貌するのも、まさにこのときで

ある。それは自らが組織する経験のリアリティによって、自らのリアリティを獲得するのである[浜本 1993：17-18]。すなわち、占いの現場とは、超自然的存在を介入させることで相談者の過去の経験を省みさせ、そのコンテクストを書き換えさせると同時に、不確定な未来に対する行動を適宜保証するという場なのである[5]。

3-2．占い後の家族の行動

トゥヌンへの訪問後、相談者であるルミは早速行動にはいった。まず、すでに実質的家長であるサルに結果を報告し、それを聞いたサルはよい日を選んで、パセック・ゲルゲルの賛成者のみの家族会議を開いた。さらに家族の中で賛成している人間を使って、トゥヌンの発言を根拠に反対している家族の説得に当たらせた。その際には、幾人かは説得に応じて起源集団をパセック・ゲルゲルにあらためるようになったが、「南の家族」と称された人々は首を縦に振らなかった。

すると、クチョスの家族は、「南の家族」を無視するかたちで、浄化儀礼の準備をすすめるようになった。あらためて「南の家族」抜きで一族寺で会議を開き、役割と費用の分担を決めはじめた。そこで筆者は、「南の家族」の処遇はどうするのかと家長のサルに尋ねたところ、自分たちの起源集団がパセック・ゲルゲルであるのは明白であり、従わない彼らが間違ってるのだという。自分たちの態度は仕方のないことであり、また正しいのだと弁明した。いわば、トゥヌンの発言は都合のよいように捨象された。トゥヌンの言では「家族をひとつにしなければならない」という条件を提示されたにもかかわらず、パセック・ゲルゲルに従って儀礼をおこうなうことのみが最優先事項となって、その条件を果たせなかった責任が「南の家族」へと転嫁された。

ここで、比喩を用いてこの事例を説明したい。占い師を情報検索のできるソフトをそなえている端末機だとすると、不可視の超自然の存在はホストコンピューターである。相談者は端末機の利用者である。利用者は端末機に自分の知りたい情報（この場合では自分自身の状況等）をインプットし、ホストコンピューターにアクセスをして情報を得るというかたちになる。端末機を通して得た情報とは、外在する不可視の民俗知である。もちろん、実際の占いの場はコンピューターのように簡便・迅速ではなく、回りくどい手順が多いが、そのメカニズムは類似しているといえるだろう。つまり、占いとは、災厄時において個々の利用者に不可視的世界の情報を提供する文化装置なのであり、また利用者はそこから得た情報を自らの行為の準拠枠として用いるのである。そして、情報は不可視的世界の権威をも帯び、正統化されているのである。だが、先にみたように相談者は必ずしも占いの言葉通りに動かず、そこから得た情報は、行

為のレベルに移行する段になって新たに取捨選択がなされる。つまり、人々は占いというシステムおよびその情報を自らの都合に合わせながら、きわめて道具的に使用しているといえる。

相談者は、占いによって自らに起こった災厄という状況の把握をし、それが処理可能であることを知る。そして最も重要なのは、占いから得た言葉によって、自らの未来の行動に正当性をもたせることなのである[6]。本事例では「儀礼を行う」という大義のために「家族をひとつにする」という条件に目をつぶる結果になったが、それでも人々は自分たちの行動は一貫しているという信念を持っていた。つまり、占いの解釈を自分たちに有利に展開させ、再編成したのである。占いを利用した人々は、ある種のストレスフルな状況を脱するために、黒呪術や祖霊の危機、そして占い等の文化資源の諸要素を、組み合わせあるいは操作しながら自らの行動に社会的有意性をうちたてていくのである。

4. おわりに

本論は、占いの現場のテキストを詳細に検討し、また出来事の背景と占い後の人々の行動を追うことで、バリにおける占いのあり方の一例を示した。本事例において示された問題の解決策は、儀礼の実行であった。出来事には原因があり解決へと向かうプロセスがあるが、結局のところ、すべての彼らの行動は儀礼の開催へと収斂されており、儀礼こそが平安と秩序を取り戻す唯一のものと捉えているようにみえた。その達成のためには、時に細則や意見の齟齬などを無視することさえ辞さないこともあった。一族のこれからの指針を示す占いでさえ、儀礼を達成するための補強材料のひとつになってしまっているのである。

バリでは、平安の維持も不幸であることからの脱却も、儀礼をもって購われると考えられている。ギアツが「儀礼はそれ自体が目的」[ギアツ 1990]であるというのも、首肯できるように思う。あらゆる出来事のモチーフ・安寧や災厄、そして本事例で見た占いなどは、最終的に儀礼に結びつけるための「演出」にすぎないのではないか。極論すれば、そのような印象を受けざるを得ないのが、バリのバリたる所以であると考える。多くのバリ研究者をとらえて離さない、バリの人々の生活を貫く儀礼への志向性が垣間見えるのである。

次章では、一連の出来事に大きな転換をあたえた憑依の語りとそのコミュニケーションプロセスについて考察する。本章では、文化的権威であるトゥヌンをあつかったが、次章では家族集団内に現れた憑依の語りをみてみよう。

[1] バリでは、霊は火葬されたあと、浄化儀礼によって海におもむくまでのあいだ、墓場近くの木（ガジュマロ等の大木）の葉に住むという信仰があり、この場合、死後先祖の仲間入りをすることを指している。
[2] この場合、この家族がヌントゥンを行わない（行えない）、すなわち祖霊を一族寺に戻そうとせず海に放置したままでいいのか？という揶揄が込められている。
[3] この議論については、小田[1986]と浜本[1983]に詳しい。
[4] 占いの語りにおけるレトリックの問題は床呂[2002]を参照のこと。
[5] 未来を保証する点、そしていままで自分のみに降りかかった災厄が、偶然ではなく必然であったと説明を受けることが、おそらく占いの最大の魅力となっている。
偶然があるということは科学で証明することは可能だが、その本質を知ることはできない。つまりサイコロを振って1がでる確率は6分の1であることは証明できるが、つぎに1がでるかはわからない。現実的には6回サイコロを振っても、1の目がでないことは多い。つまり、6分の1という確率は、理論的には正しくとも、永遠という時間の中でしか実際はありえないことになる。
この意味ではもちろん占いも不確実であるが、占いの役割は「1の目がでる」ということを断言することと、サイコロを振るという行動に移させ、結果がわかっていると思わせることにある。